

# 自伝的記憶の自己機能と過去への態度が抑うつに及ぼす影響

○橋本淳也・柏原志保・小林亮太・平本亮介・朱建宏・中尾敬・宮谷真人  
(広島大学大学院教育学研究科)

## 背景

自伝的記憶とは過去の個人的経験の記憶である。自伝的記憶はただ想起されるだけでなく、想起によって我々に様々な影響を及ぼし機能的に働くことが知られている。その一つに、自身が何者であるかを認識させ、自己の一貫性を感じさせる「自己機能」がある (Bluck et al., 2005)。

自己機能は精神的健康との関連が指摘されている。特に近年、自己機能の使用頻度が抑うつ状態に影響することが報告されている (Grace et al., 2018)。ただし一概に過去の自己を認識するといっても、過去をどのように捉えているかによって精神的健康への影響は異なると考えられる。すなわち、過去に対する態度が否定的であるか肯定的であるかによって自己機能を使用する頻度が抑うつ状態に及ぼす影響は異なると考えられるが、未だこの点は明らかとなっていない。

そこで本研究では、自己機能の使用頻度と過去への態度が抑うつ状態に及ぼす影響について明らかにするため、質問紙調査を行った。

## 方法

**調査対象者** 大学生 58 名 (女性 33 名, 平均年齢 20.14 歳) を対象とした。

**質問紙** 自伝的記憶の自己機能を測定する尺度として日本語版 TALE 尺度 (落合・小口, 2013), 過去への態度を測る尺度として日本版 ZTPI (下島他, 2012), 抑うつ状態を測るために CES-D (島, 1998) を用いた。TALE 尺度は「自分の信念が, 時間とともに変化してきたかどうかについて気にかかるとき」等の項目に対し, 人生を振り返る頻度を 5 件法で評定を求めた。ZTPI は時間的指向性について評定する尺度であり, このうち分析には過去否定と過去肯定の下位尺度を用いた。過去否定は過去を否定的, 回避的にみる態度を表し, 「人生の中で, ああすべきだったのに, と思うことが多い」等の項目からなる。過去肯定は過去に対する温かく感傷的な態度を表し, 「昔のことを考えるのは楽しい」等の項目からなる。CES-D では提示された項目について過去 1 週間のうちに感じた頻度を 4 件法で評定を求めた。

## 結果と考察

自己機能と過去への態度が抑うつに及ぼす影響を検討するため, 抑うつ状態を目的変数, 自己機能, 過去否定, 過去肯定および自己機能と過去否定, 自己機能と過去肯定の交互作用項を説明変数として投入した重回帰分析を行った。その結果, 過去否定の主効果 ( $\beta = .45, p < .001$ ), および自己機能と過去肯定の交互作用 ( $\beta = .29, p = .02$ ) が有意となった。単純傾斜分析の結果 (図 1), 過去肯定の高い人では自己機能の使用頻度で差はなかったが ( $\beta = .15, p = .41$ ), 過去肯定の低い人では自己機能の使用頻度が少ない人ほど抑うつ状態が高かった ( $\beta = -.42, p = .01$ )。

以上の結果から, 過去に対して否定的な態度を持つ人は抑うつ状態が高いことが示された。さらに, 過去に対する肯定的な態度が低くとも, 自己機能を果たす頻度が多い人は抑うつ状態が低いことが明らかとなった。このことは, 過去に対する態度によって, 自伝的記憶の自己機能が精神的健康に及ぼす影響が異なることを示唆している。

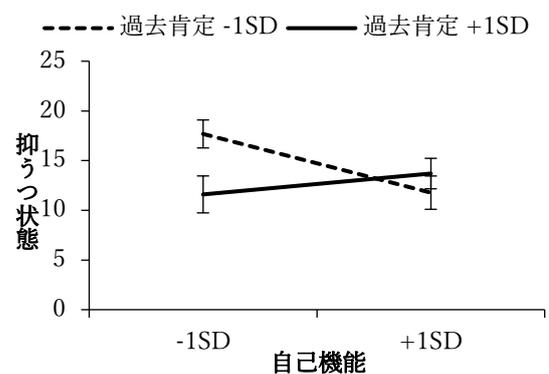


図 1. 自己機能と過去肯定が抑うつ状態に及ぼす影響  
(エラーバーは標準誤差)

## 謝辞

本研究実施にご協力いただいた, 石田紀香さん, 岡崎彩香さん, 岸本和美さん, 中野歩菜見さん, 堀之内滉さん, 原口優輔さん, 孫玥澤さん, 山本一希さんに心より御礼申し上げます。

## 主な引用文献

Grace et al. (2018). A dysphoric's TALE. *Memory*, 24, 1173-1181.